

平成二十八年「花のまわりみち」

俳句入選句

木村 里風子 選

特選

(三句)

「二席」

桜狩り地震なかけめぐる星に住み

宮本 恭子

(評) 地震は日本だけではなく。地球いたるところである。桜狩りも落付いてはという感じ。一日も早く、終息して欲しい気持であろう。

「三席」

朝どくろ鳥語溢れてをりにけり

山岡 祥子

(評) 朝の桜の新鮮なところに鳥が来て鳴く、溢れて朝から群れて鳴くのが賑やか。美しい桜は鳥にも分かったのであろう。

「三席」

腰おろす長椅子に花散りきたる

福島 正則

(評) 園内の桜を見て廻り、ひと休みの長椅子で花の美しさに疲れたのか、今度は花が作者を見舞った。花が降り来たのである。

入選

(五句)

句帳手に花の過客となりにけり

吉岡昌文(雅文)

(評) 花の過客、芭蕉の一文を思わす。しかも、句帳を手にてあり、作者も芭蕉気取りであろう。

一人旅花が友達まわり道

真木 トミエ

(評) 旅の途中で知った花のまわり道であろうか。花が友となり一人旅の一日を満たした。

退職の今日の桜の輝ける

大塚 豊

(評) 勤めあげて退職の日と共に満開の桜が作者の心を満たし桜と共に輝いたのである。

コイン打つ音も軽やか桜見る

松井福朗

(評) いかにもと言えるのはコインを打つ音が造幣局であり、桜の見事な美しさと軽い音のリズムがよい。

八重桜夕日に染まり散りにけり

中植紀子

(評) 夕日に染まり散る八重桜の美しさがあり、平明に詠み詠嘆がある。

佳作

(十八句)

尾の長き鳥来て鳴けり花曇

亀井朝子

しろじろと花の若木や地震の夜

村越 縁(ぼたん)

たをやかに揺るる大枝花の影

正山史明

盛り上る花びらに酔ふ昼下り

青笹俊枝(年重^{としえ})

琴の音にかすかに震へ紅手毬

秋山博江

乳母車の双子はしやく花ふぶき

浅田洋子

琴の音や見上ぐる花の青き空

藤本卓昭(卓水)

造幣局塀の内なる桜狩

渡辺義昭

ときめきは八重の桜の紅の濃し

諫山みつ子

一幅の景となる道さくら咲く

小原桂子

散る桜付けたるままの家路かな

山崎和子

花屑といふも惜しくて手に掬ふ

三尾榮司

友逝きてひとりぼつちの八重桜

長谷美白

花影と重なりおうて人の影

若宮直美

黄昏の空を背にする桜道

田中宏之

琴の音や花見比べるまわり道

福場春子

橋渡り造幣局は花の園

清 允子

幼な子の手にあまりある花手鞠

永利五十鈴(五十鈴)

選者吟

地に影の濃し満開の八重桜

木村 里風子